

堺屋太一

俯うつむき加減の

男の肖像

下



新潮社

俯うつむき加減の
男の肖像

堺屋太二
下

新潮社

うつむ かげん おとこ しょうぞう
俯き加減の男の肖像 (下)

1995年7月25日発行

【著 者】 さかい や たいち
堺屋太一

【発行者】 佐藤亮一

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替00140-5-808

【電話】 編集部 (03) 3266-5411 読者係 (03) 3266-5111

【印 刷】 二光印刷株式会社

【製 本】 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Taichi Sakaiya 1995, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-406302-9 C0093

目次

第四章 破局来

5

第五章 大坂騷然

133

第六章 新たなる夢を探して

201

あとがき

314

装幀◆西のぼる

俯き加減の男の肖像
(下)

第四章 破局 来

建設は一日にして成ることはない。

だが、破壊は一瞬にして起り得る。

建物も、組織も、人生も、社会も、そうだ。壮大な構造を目にする者、健全な暮しを送る者、繁栄した世に生きる者、そうした人々は忍び寄る破局にまず気付かないし、たとえ気付いても明日に起るとは信じない。人間の思考は、物質の運動以上に惰性に流れ易い。

「宝永」という記憶に残ることの少ない元号の短い期間に、そうした突然の破局が起った。慶長・元和の昔から約百年の泰平の中で、徐々に成長して来たお金の経済と華麗な文化とが、僅か数年の間に瓦解し、再び活力と陽気さを取り戻すことがないまでに打ち砕かれてしまうのである。

宝永二年（一七〇五年）四月、人々は奈落の寸前に立っていた。だが、それに気付いている者は一人としていなかった。ここ数年来、景気は悪かった。十年前（元禄八年）に断行された金銀貨幣改鑄直後の馬鹿景気に比べると、何もかもが後退していた。米麦の生産も、人々の暮しも、諸々の商売も、幕府や諸大名の財政も、悪くなっていた。しかし、それもみな一時的な失敗と不運のせいと考えられていた。

元禄九年の凶作は西日本の、同十二年のそれは東日本の百姓たちを苦しめ、武士の懐と大名たちの財政を悪化させた。それを救済するために出された「借金相对談合令」は、商人たちに打撃を与え、一段と景気を悪くした。百姓、武士、商人と一巡した損失の回り持ちは、金融の混乱と

経済活動の停滞となって、また振り出しに戻って来たのである。

時の流れが下り坂になったことは、みな感じてはいた。だが、まだ華やかだった元禄の温^{ぬくも}りは十分に残っていた。江戸や京、大坂の町には結構活気があり、人々の衣裳は派手で、芝居小屋も賑^{にぎわ}っていた。農村でも食事はかなり贅^{ぜい}沢だった。瀬戸内沿いの豊かな農村で、「祭婚儀の寄合いにも一汁三菜以上を禁ず」という儉約令の抜け道として、御飯の上に魚貝をちらす鮓^{すし}が始められたのも、この頃である。

人々の懐には、元禄の世の好況がもたらした消費癖とお金が残っていたのだ。殊に、この三、四十年間に急成長した新興商人の中には、内蔵に金銀を山積みに行っている者も大勢いた。もっとも、その一方では、数年来の不況で倒産、閉店に追い込まれた老舗も珍しくはない。しかし、それはまだ、個々の店の怠慢と不運のせいに行ける程度の数だった。

こんな中では、この下り坂のすぐ先に、深い断崖があるなどと思う者がいなかったのも不思議ではあるまい。この時期の人々の心を占めていたのは、まだ見ぬ暗い未来ではなく、記憶に生々しい輝かしい過去の方だった。

この点では、江戸城に鎮座する時の為政者・五代將軍綱吉とその幕僚たちとて同じだ。綱吉とそれを囲む実力者——柳沢吉保や萩原重秀ら——は、阿呆でも悪人でもなかったが、誰にも見えない未来の危機を感じとるほどの天才でもなかった。彼らの心配が、もっと身近なこと、六十歳になった將軍の健康状態や江戸域内外での政治勢力の動きの方に集中していたとしても、非難できないだろう。

五代將軍綱吉の治世三十年間は、フランス王ルイ十四世の治世の後半と、ほぼ時期を同じくしている。そしてその時期に、両者が行った政策と當んだ宮廷は、著しく類似している。共に、従来の封建的特権を削減し、多くの大名貴族を取り潰^{つぶ}し、全国的に貨幣経済を拡張、壮大な建物

を造営し、学者文化人を周圍に侍らし、多くの見識高い女性を集めて華やかなサロンを楽しんだのである。

このことは、当時におけるヨーロッパ先進国と日本との経済社会の發展度合がほぼ同じだったことを示している。実際、將軍綱吉は、ルイ十四世と同じく絶対王制を目指して、それに半ば成功もしていた。もしそれが本当に確立していたなら、日本は世界最初に産業革命を興した国になり得たかも知れない。

しかし、両国の置かれていた環境は全く異なり、民族と為政者の思想も違っていた。フランスの太陽王はやたらと軍備を拡大し、盛んに戦争を仕掛けたのに対し、日本の將軍は犬猫魚鳥にまで憐みをかけるほどの平和主義に徹していた。このため、フランスでは封建貴族の破壊と国民に対する搾取が徹底し、日本では封建制度への逆戻りが起る。天下泰平の島国では、絶対王制を確立せねばならない危機感も必然性もなかったのだ。そしてその平穏さが、閉された島国の中で、優雅とも隠微ともいえる政治と権力構造の変化を生むことになった。將軍綱吉の高齡化と共に、次期將軍に賭ける勢力が秘かに蠢き、さしもの独裁者綱吉の威令も末端では行き届かぬ所が現われ出した。

こうした傾向は、この前の年の暮、甲府宰相綱豊（のちの六代將軍家宣）が將軍後継者として江戸城西の丸に迎えられたことによって、急速に強まっている。

五代將軍綱吉は、あらゆる努力にもかかわらず男子に恵まれなかった。それならば、將軍位に就くべくして若死した兄綱重の子・綱豊が後継者に指名されるのは至極当然の順序だ。水戸黄門光圀などは、たとえ綱吉に男子ができて兄の子を立てるのが筋だ、と主張していたほどである。

だが、綱吉はそうしなかった。一人娘鶴姫への情に引かれて、その夫紀伊大納言綱教を立てたかった。綱吉が五十九歳という当時としては相当な高齡になって、ようやく綱豊を後継者と

して西の丸に入れたのは、娘の鶴姫が死亡し、紀伊綱教への未練が絶えたあとのことだ。綱豊は二十年間も、当然に得べき次期將軍の地位を叔父綱吉によって阻まれていたのである。

こうした経緯から見て、綱豊が將軍綱吉をよく思っているはずがない。とすれば、老い先短い現將軍にあまり肩入れするのは考えものだ。目敏い官僚たちが、そう考えるのも当然だ。

官僚たちは、表面上は忠実真面目を装っているが、実際の執行には嚴格さと迅速さを欠き出した。そのことが末端ではさらに増幅され、庶民の中にも感じ取られた。

鋭敏な感覚と広範な情報網を握る柳沢吉保らが、それを悟らぬはずがない。幼少の頃から綱吉に仕え、綱吉ただ一人に忠義を励んで来た柳沢らは、こうした政治の緩みを憂慮し、世を引き締める劇的な効果のある事件を起したがっていた。古来この国の政治と国民感情は、事実よりも象徴によって、平均値よりも目立った事件によって誘導されることが多いのである。

「上方において伊勢抜け参りが流行り出した」

という報せが江戸に届いたのは、ちょうどそんな時期、宝永二年四月はじめのことだ。

「怪しからぬ」

柳沢吉保らは、当然のようにそう反応した。抜け参りはあからさまな御法度破りだ。一夜の留守にも組頭や名主庄屋に届け出ることが義務付けられている幕藩体制の中で、無届けで七日間も郷村を抜け出すとは許し難い。しかも今は儉約一途を厳しく申し付けている御時世、物見遊山などは正規の届けがあつても拒むべきなのに、各地の代官奉行も傍観しているとはどういうことか。気楽に抜け参りなどする百姓町人もさることながら、それを止めようという役人どもも怪しからぬ、というわけだ。

緊張と苛立ちの中に暮していた江戸の為政者たちは、そんな風にこの事件を見た。いや恐らくはそれだけではあるまい。より大きな不快感と不吉さを感じたはずである。というのは、これには厭な前例があったからだ。

前にも述べたが、別名「お陰参り」ともいわれる伊勢神宮への抜け参りが爆発的に大流行したのは、この宝永二年がはじめてではない。それ以前にも、元和元年（一六一五年）と慶安三年（一六五〇年）に前例がある。

大坂落城の直前に起きた元和元年の場合は、戦火と荒廃が予想されただけに自棄的でもあり規模も小さかったが、慶安の折には総数百万人を超える大潮流に発展した。

慶安三年という年は、三代将軍家光の二十六年にわたる治世の最後の年だ。翌慶安四年家光は四十八歳で死亡する。同じこの年、有名な由井正雪の陰謀事件が発覚、翌承応元年には若衆歌舞伎の禁止と湯女風呂の大流行が記録されている。いずれも当時の為政者の目には退廃的と映る性的興奮を求める風俗営業だ。

これらのことは、慶安三年という年が、一つの転期に当たっていたことを示している。これに先立つ寛永年間（一六二四～四四年）は、武家諸法度や参勤交替の制度が確立され、鎖国令が發布されたりして、徳川幕藩体制の基盤整備が大いに進んだ時代である。同時に戦国以来の大名が数多く取潰され、浪人が巷にあふれた。そしてその浪人に対しても江戸追放という厳しい弾圧が加えられた。戦国遺風の根絶やしと武士に対する締めつけがどんどん強化されていたのである。

その反面、江戸は大発展し人口は急増、家光の豪華な生活と普請好みもあって幕府は大いに散財、金銀貨幣が世にあふれ出した。当然、商業が盛んになり経済は大成長した。諸国から江戸に送られる物資の量は飛躍的に増え、それを担当する京、大坂なども大いに栄えた。のちの元禄時代に上方を代表する豪商に成り上る鴻池家の始祖新六や住友家の家祖友政が、せっせと富を蓄え

業を上げたのもこの頃だ。

ところが、二十年間続いた寛永が終り、正保、慶安と短い元号が続く頃になると、様相は一変する。江戸の建設も一段落して需要は減退、過度の大名取潰しによる浪人の増加も加わって景気は急激に悪化した。さらに將軍家光の衰弱が目立つに至って政治のたがも緩み出した。由井正雪が時代の流れに不満を持つ浪人たちを集めて幕府転覆の陰謀を謀んだといわれるのも、この真相はともかく、こうした背景があったればこそであろう。

慶安三年の「お陰参り」の爆発的流行とは、正に「一つの時代の終り」に起った事件である。「何となく、あの頃に似ている……」

宝永二年四月、上方での「お陰参り」の増加を知った人々の中には、そんな歴史の類似性を思い出す者も少なくなかったに違いない。そしてそうした人々は、慶安三年の前例のあとに続いた暗い時代のことをも思わずにはいられなかったであろう。それは十万八千人もの死者を出した明暦三年（一六五七年）の江戸の大火、万治二年（一六五九年）に起った京の大火、そして寛文二年（二六六二年）の上方の大地震など、各地に災害や飢饉が多発した不幸な時期である。

「今度もまた……」

そんな不安が少なからぬ人々の脳裡をかすめた。特に江戸の首脳部にとっては、これが世の中の動揺を生み、將軍綱吉の老いと衰えを誘うことが心配だった。それでも彼らは、

「刀にかけても止めるべし」

とは命じなかった。そんなことが不可能なのをよく知っていたからだ。

凡そ、徳川時代の日本ほど、建前と本音の異なること甚だしい社会はない。殊に、泰平百年を経た元禄・宝永の頃ともなれば、東照神君家康以来の動かし難い祖法と、その後の変化に対応した現実的修正とが複雑に絡み合い、法規も組織も二重三重の建前と現実の重複で混乱している。

大体、大実力者の柳沢吉保からして一介の御側御用人なる將軍秘書役に過ぎぬまま、老中も若年寄も無視して政治を行つてゐるのだ。今更、すべてを法規通りにとこえる柄ではない。

それどころか、そんなことはいつてみても到底実行されそうにない。元和以来、幕府も大名も、軍備縮小にこれ努めた結果、今やこの国はほとんど完全な非武装国家になつてしまつてゐる。寛永以降の日本には、軍隊といえるような武力集団は全くなかつたのだ。

武士は腰に両刀を差し、床に祖先伝来の槍を飾り、いかにも武張つた格好をしているが、その実態は行政官かせいぜい治安維持の警察官で、大規模な集団的軍事行動などできるものではない。そのための編成もされてゐないし訓練も受けてゐない。おまけに、この時代において最も強力な武器だつた鉄砲は劣化が著しく、幕府にも諸大名にもともに射てる銃はほとんどない有様だ。

これでは、人口の三〇程度の武士が領民全体の動きを武力で規制することなど不可能だ。徳川二百六十年間に、百姓一揆が武力弾圧で大量の死傷者を出したというような例は全国に見当らない。幕府や大名が採つた一揆対策は、ある程度百姓たちの要請を入れ、責任者の家老や代官を処罰する一方、それに満足して一揆が解散するのを待つて首謀者を逮捕処刑する「喧嘩両成敗」方式である。徳川幕藩体制が長期にわたつて平穩に生き続け得たのは、力による弾圧ではなく、柔軟な妥協と象徴的な報復という政治技術のお陰なのだ。

こうした雰囲気と社会構造の中に生きる武士たちが、澎湃として起り出した抜け参りの群集を力づくで抑えようとしなかつたのは当然だろう。そしてそのことを熟知していた江戸の高官たちも、敢えてそれを命じはしなかつた。できないことをいわないのが、為政者の權威を保つ良法なのである。

江戸は、不安と不快感をこめて、ただ、

「よく見張り、よく報らせよ」

と、上方の大名や代官に命じただけであつた。百年にわたる幕府のやり方をよく学んでいた役人たちには、それで十分だ。彼らもまた、不安と不快感を心に秘めながら民衆の意に逆らわぬように用心しつつ人の流れを見つめていた。ただ、その本能とさえなっている象徴的報復の機会だけは抜け目なく探していたのである。

因みにいえば、伊勢「お陰参り」の爆発的流行は、この時が最後でもない。明和八年（一七七一年）と文政十三年（一八三〇年）にも起つてゐる。慶安三年以来、六十年弱に一回の割で繰り返されたわけだ。そしてそれは、いずれも慶安・宝永と同じような一つの時代の終り、つまり下り坂のはじめに起つてゐる。

明和八年というのは十代將軍家治の治世で、田沼意次が御側御用人として権力を振つてゐた最中である。田沼は、その初期には科学技術の振興や河川改修などで実績を上げ、享保以来の沈滞した経済を發展させることにも成功したが、明和に入る頃から失政が目立ち始める。そしてこの「お陰参り」の流行のあとには、天明の大飢饉（一七八二―一八三年）に象徴される大不況時代がやつて来るのである。

文政十三年（天保元年）も同様だ。文化文政の経済的繁栄と華麗な文化が下り坂に入り、やがて天保の大飢饉（一八三二―一八三五年）の暗い時代へと陥つていく境に當つてゐる。

こう見て来ると、「お陰参り」という素朴な現象は、一つの繁栄の時代に蓄えられた民衆のエネルギーが、下り坂に入つて抑圧された時、空想的救済を求めて爆発する現象だったといえそうだ。そこには、ヨーロッパの中世に見られた「鞭うつ者の行列」ほどの宗教的エクスタシーはなく、むしろ物見遊山の陽気さがある。

それがほぼ正確に六十年弱を周期として繰り返されてゐるのは、鎖国下にあつた徳川時代の日本に、景気の長期波動があつたことを示している。近年になつて、コンドラチエフという経済学

者が、十九世紀以来の欧米経済を分析し、五十年から六十年をひとつの周期とする大きな経済の波があることを発見した。いわゆる“コンドラチエフの波”といわれるものだ。徳川時代の日本は鎖国であつたが故に、より正確にそれが現われたのである。